OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ペーター・ラインハルト・グライヒマン『ノルベルト・エリアスの歴史社会学的心理学』
Author(s)	徳永, 恂; 宮田, 敦子
Citation	年報人間科学. 1992, 13, p. 195-206
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/9949
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ペーター・ラインハルト・グライヒマン
『ノルベルト・エリアスの歴史社会学的心理学』

徳永　恂・宮田敦子　訳

一

「個々人の心の構造であれ、諸世代の連なりという相を帯びた歴史の変化であれ、それがもっと充分に理解されるようになるのは、長い世代から世代への連綿たる連鎖を、今日可能な以上にもっとよく見渡し、考える事が出来るようになった時であろう。」と、ノルベルト・エリアスは一九三九年に書いている（一九三九年、二巻、四五一頁）[1]。

ノルベルト・エリアスのこの長期的展望に立つ心理学（Langzeitpsychologie）は単なるプログラムだけに終わるものではない。それは、人間の行動並びに感情の変化についてまる六〇〇年を越えて広がる例証を持つ経験的研究を以て始められている。すでにこの点で彼のやり方は二〇世紀末葉の大抵の心理＝歴史的試みとは区別される[2]。それらの試みは、しばしば専ら点としての歴史的出来事を志向し、歴史的な所見を結び付ける際にも専門心理学的解釈をおろそかにするか、あるいは逆に歴史的資料と取り組まないで心理学の社会的基礎づけを始めようとする。エリアスが二〇世紀の三〇年代に、特に『文明化の過程について』の中で概要を述べているような「個々人の心の構造」のモデルは、哲学、とりわけ新カント学派の哲学から一線を画して、同時代の心理学の様々な伝統路線を受け継いでいる。それは長期に亙る社会的な諸発展の多次元過程モデルに組み込まれた一要素をなす。それとともにそのモデルは普遍史的伝統の中にも立っている。ある「社会的図柄」（Figuration）のレベルで個々人の相互依存が調査され、更にまた、例えば「宮廷社会」や「国家」といった図柄を別のレベルで形成する人間と、そ

れとの関わり合いが研究される。力の持つウェイトの変化、ここに挙げた二つの（あるいはもっと多くの）レベル間の力の差の変化、そしてそれらの変化が及ぼす個々の人間への、あるいは個人的な自己規制の規範（一九八七年）への影響が調べられる。一つの一般的な権力理論（一九六九年及び一九八三年）がこの社会的な発展モデルの背景をなしている。その時々の社会的生存単位（一九八五年）の持つ力の中心が本来の心理社会的「形成審級」をなしている。それらの間の力の差異から社会的な気質、我々と我のバランス（一九八七年、二〇七頁以下）の変化が影響を受け、個別化の過程の衰退や発展が規定される。「個々人の心理構造」というエリアスのモデルは、かなり一般的な理解を得ている総合形成（一九八四年）の独創的な業績である。経験的（歴史的）調査結果とそのモデルによる理論的論究、分析的思考と総合形成的思考の歩みが絶えず互いに入れ代わる。それ故に本来の意味での「理論的な」諸命題は全著作にばらまかれている。こういうエリアスに特徴的なやり方は、このようにして結果的にはいかなる特定の（社会）科学の伝統路線にも分類されるものではない。しかしやり方としては、それは様々の先行する試みや同時代の試みなしには殆ど考えられないものである。

エリアスの心理学の研究方法を規定しているのは、「社会的な形成物はただ全体としてのみ理解され得る」という事である。「それは社会学への全体観察の導入である」と神経科医であり集団療法士であるS・H・フックス、本名 Foulkes は一九四一年『文明化の過程について』の第二巻の書評で認めている。そしてこの、分析的に分離可能だが、事態としては一体をなしているものを一つにまとめようとするやり方は後にはもっと強められる。例えば、参加（Engagement）と距離化（Distanzierung）という概念は「二つの違った心理的態度のグループに」分属するものでは「ない」。従ってこの概念を使用する事によって「指し示されるのは、人間であれ非人間的対象であれ自分自身であれ、それらに対する人間の関係に於いて、参加と距離化のどちらにどれだけ動くかという行動ないし衝動体験の二つの型の間の変化するバランスなのである」。エリアスは次のように説明している（一九八三年、六五頁以下）。「人間の心理的、社会的特徴を単純に種々様々なものというだけではなくて、究極的に切り離されて存在する独立した人間の相として取り扱うのが相変わらず一般的な慣習である・・・『参加した』とか『距離を置いた』、『包含された』とか『分遣された』というような概念は、社会的、心理的変化は区別は出来るが切り離せない事象なのだ、という事を表現するのを可能にする。」そしてこの事は尚一層非人間的な対象に対する関係に当てはまる。「特に哲学的伝統においては、人間的『主体』の非人間的な自然『客体』に対する関係についての説明を、『主体』の心理的観点についてのあらゆる説明に対して厳しく防護するのが普通になっている。方向づけの手段としては、『参加』とか『距離化』といった概念の方が、他のもっとよく使われている概念、――例えば『主体的』とか『客体的』といった概念のように――二つの異なった本質、『主体』と『客体』、の間に静的な、橋渡し出来ない溝があるかのように思わせる概念よりも、我々には

好ましいのだ。」――エリアスは繰り返し強調して、「部分統一の特徴研究が全体性の問題に鍵を渡す、あるいは他日渡すであろう時に拠り所となる、説明モデルは普遍的なモデルである」と主張するような、すべてのモデル理論的観念を退けている。しかしそういう場合実際問題になっているのは大抵ただ、統一性の研究のために比較的低い組織水準の上で測られる部分統一だけである。機械論者と生気論者の間の論争においてであれ、あるいは普通「肉体」と「精神」と呼ばれているものの関係についての論議においてであれ（一九八三年、七〇頁）、「この場合になされる解決への提案は純粋に物理学的なものも純粋に形而上学的な方向におけるものも大抵は全く同一の思考様式を代表するものであり、等しく不適切である。一元論的であれ二元論的であれ、『精神』に『物質』と同じ質を帰していようと――すべてのこうした傾向は、ひとつの総合的な統一をその部分統一から説明しようとしているのである。」

二

狭い意味での「歴史心理学」へのエリアスの主な貢献は見出し語風に概要を述べる事が出来る。彼の洞察の多くはそのエピグラム風の短さのお蔭で昔からよく知られているが、他のものは相変わらず近づき難い外国語のテキストのせいであまり知られていない。我々はここにこの含蓄のある簡明な表現をいくつか取り出してみよう。多くの彼の叙述の並外れた具体性――それは心理学ないし社会学における「理論的」テキストに支配的な性格とは全く異なっている――は、まさに絶え間ない混じり合い、即ち提示された実例とその直後に続く解説的関連知が交互している事に基づいている。あらゆる出来事の経過は、こういう言い方が許される限り、プロセス的概念によって表現されている。心理的相と社会的相とは常に同時に考察され、完全に互いに融合されているように見える。この関連における殆どすべての概念は一貫してそうしたものとして伝統的な心理学と社会学において同時に使用され得る。人間に関係づけられないすべての概念は出来るだけ回避される。例えば概念を好んで専ら「意味システム」あるいは「言語的なコミュニケーション」に哲学的に還元する、支配的な社会学的理論とは対照的に、「人間への過程社会学的集中」は、歴史的証明と心理学的テスト結果の統合を容易にする。

一、「自己強制を強いる社会的強制」と「強制の長期的展望への拡大と自己強制の拡大」（一九三九年と一九七六年、第二巻、三一二頁以下）――この二つの定律は、人間の文明化過程の結果と部分的過程を言い表しており、その後五〇年を経ても異論を挟まれてもいないし論破されてもいない。まず「強制」という概念は大抵専ら個々の専門ごとに使われてきた。精神医学や精神分析では例えば、自我自身に属すると思われるが、しかし馴染みのないもののように感じられて、それから免れないと不安を生じさせるような強迫現象のために使われた。あるいは法律学や社会学では、例えば国家の強制装置あるいは強制執行（マックス・ヴェーバー）といった組織された

権力行使のために使われた。今この二つの基準面が理論的に結びつけられる。

「本能生活及びそこにおける抑圧相のモデル化は人間の生活をあまねく貫いている社会的な従属や依存の機能である」、という事をエリアスは今示す事が出来る。「この個々人の従属や依存は人間関係の構成に従ってその都度別の構造をもつ。我々が歴史の中で観察出来る本能構成の多様性はこの構造の多様性に相応している」（一九三九年及び一九七六年、第一巻、三二三頁）。そして五〇年後（一九八六年）彼は要約している。「変化する社会的文明の型という意味における自己強制への社会的強制並びに個人的な自己規制の習得は社会的普遍概念である。」しばしば簡略化してなされるように、専ら自己強制の持続的な増大と強化を文明化過程のモデルの中心部と受け取るなら、それほど洗練されていない社会においても又非常な厳しさを持つ自己強制が登場し得る、という事を見落とす事になる（一九八四年、三四頁）。ただとりわけそこで特徴的なのは、自己規制は一様でない、しばしば断続的な性格を持つ事である。

二、歴史社会学的権力理論がエリアスの全著作を貫いている。それは権力の「無定形な」性格（マックス・ヴェーバー）についての諸仮定を回避し、それに代って人間の権力源の持つ多形的な性格から、また肉体的強さや暴力から、生活手段の調達から、特定のポストにおける自由裁量の可能性から、人間関係の感情的な原子価から、そして知識から出発する。それは又、例えば専ら「暴力」に、組織科学においてはただ「決定」に、あるいは心理学においては特に専ら「業績」や「影響」あるいは「動機づけ」に基づいていた、以前の「権力論」の見解をも回避する。人間の間の大きな権力不均衡故に大抵の権力理論が権力非対称モデルを描く時、それはまだ、権力関係はそれ故ただ一つの方向からのみ見られ得る、という事を意味してはいない。権力は物ではなく、あらゆる人間関係の一構造特性である。

三、インサイダー・アウトサイダーという枠組は権力理論の一つの特殊なケースである。それは労働者団体（一九六五年）、物理学者の思考パターン研究（一九八二年）において、そして又詳細な理論的草稿（一九七六年、七一四六頁）において様々な形で研究された。それはとりわけ、経済的な差異が既存の対立関係をもはや殆ど根拠づけられない権力不均衡のケースに関連している。心理学者にとってこの枠組は特に一目瞭然である。より優れた集団はその権力源を自ら作り出した一種の集団カリスマから汲み出す。従ってより優れた集団はとりわけ集団の旗印によってより劣った集団と持続的に闘うのを好む。ここにエリアスはマルクスの階級理論の更なる発展を見ている。

四、三組の根本的制御（一九七〇年、一七三頁以下）の原則の中でエリアスは『文明化の過程について』の中で暗示的に用いた多次元の分析的研究法を再度簡明適確にはっきりと表現している。ここでも又心理的次元の完全に統合された過程モデルへの挿入が心理学者達に明らかにされる。歴史社会学者達のために彼がしようとするのは、「非常に長期に亘る社会的発展の流れの様々な段階を規定する

際の助けになり得る測定概念の型の為に一例を挙げる事である。三、組の根本的制御は社会の普遍概念に属する。一つの社会の発達状況が規定されるのは、一、人間外の出来事の関連、従って・・・『自然現象』・・・に対する社会のコントロールの程度によって、二、人間同士の関連、従って・・・『社会的関連』・・・に対する社会のコントロールの程度によって、三、社会の構成員一人一人の、どれほど他の人々に依存していようとも、幼年時代から多かれ少なかれ自己規制する事を学んでいる個人としての自己自身に対するコントロールの程度によって、である。」――この「コントロールの型」の相互依存と相対的な自律への更なる主張とともに、モデル理論的に再度強調されるのは、幾世代にも亙って徐々に出来上がる「個々人の心の構造」、個別化の社会的ひな型の成立が、いかに「社会」の発達や「自然制御」の発達と並んで同じ重さで注目されているか、という事である。二〇世紀の末頃に高度に形式を整えられた多数の社会科学的「進化論」と比較すると、「自己自身への関係」のこの発達過程の方が遥かに強く強調され、遥かにしばしば定式化され、それ故に歴史知識の偶然性の科学的統合へより充分な準備がなされている。

五、「参加と距離化」（初発表は一九五六年）の間のバランスについての定理とともに、情動に深く縛られ強い空想内容を持つ人間の知識と長い人間性の発達過程で様々に到達された距離化の水準を幾つかの文明理論的問題の出発点にする学習理論が実践的に立案された。しかしこの研究の知識社会学的観点に較べてその科学社会学的結論は殆ど注目されなかった。自らの研究分野に対する参加と距離化の関係をもっとよくコントロールするという、「人間科学者」へのエリアスの要求は又、いわゆる価値判断論争あるいは実証主義論争という理論的に長い間未解決のままの問題への独創的な貢献である。

六、『時間について』（一九八四年）という研究は「時間についての研究であるが、時間だけについてではなく」、とりわけ総合を形成出来るという人間の能力についての研究であり、我々の感覚器官がただばらばらに記録する、人間的な自然並びに無機物の世界の出来事から、一歩一歩実際の自然の出来事についての関連知を創造する、人間性の長い社会的過程についての研究である。その関連知は様々な「変化の連続体」を、相関関係を示す尺度として次第に意識的に取り込む事を可能にする。「社会的時間強制」の研究は又「文明の強制」の研究のための一つの模範である。その射程距離は二〇世紀の社会科学者の数多くの「時間」研究から抜きん出ている。それは又、人間の時間強制の成立はとりわけ時計という機械的な更なる発達に還元され得る、という一般的な観念（例えば物理学者達や技術史家達の）に強く反対している。――要するに（四六頁）、「知覚する人が時間と空間の象徴的な性格を考慮に入れる事なく、継起する流れの中で、つまり時間と空間の中で、出来事として知覚され得る出来事がある。彼等はこの場合、知覚可能な過程を、時間と空間の中で起る何ものかとして知覚する為には、整序する人間によって習得された意識総合が必要だ、という事を意識してはいないし、

考慮してもいない。」

七、『個人の社会』（初発表は一九三九年）という言葉でエリアスは、伝統的な「社会学」と「心理学」の間の彼独自の中間的立場、社会的発展と心理的発展の統合を強調して要約している。この姿勢が彼の著作を初めから特徴づけている。それは一九二四年の「理念と個人、歴史概念への批判的研究」という哲学的学位論文とともに始まる。それは従って、例えば、「個人と社会の関係の社会学的論議の中で非常にしばしば見られる二者択一から逃れる」ために、「個人的な自己規制の段階あるいは型」に集中する。そしてその事が、これまで「個人」と「社会」という概念は、しばしば二つの別々に存在する対象であるかのように使われてきたが、その基になった古い慣習が、なぜ間違っているのかを明らかにしてくれる。」（一九八七年、二四六頁以下）こうして彼は歴史心理学と社会学の総合において多くの精緻な成果に到達している。その成果は、しばしば支配的な見解に対して論争的意図を含んでいるのだが、それは大抵の場合殆どまだ感じられていない。「われわれ同一性（Wir-Identität）をもたないわれ同一性（Ich-Identität）は存在しない。我と我々のバランスの重さ、我と我々の関係の型だけが変わるのである。」あるいは（九〇頁）、「社会は平等にし類型化するものであるばかりでなく、又個別化するものでもある。」あるいは又（一九八六年）、「人間の社会化と個別化は従って同じプロセスの違った呼び方である。」

エリアスのもっと広い意味での「歴史心理学」に対する主要な貢献は、彼の研究方法並びに長期過程モデルの中に基礎づけられてある。彼のやり方、彼の体系づけを彼は「経験的かつ理論的」と特色づけている。彼はあらかじめいかなるモデルも組み立てたりしないし、法則科学的にも規範設定的にも取り扱わない。彼は研究方法をあらかじめ現実へのある特定の経験的なアプローチに結びつけたりしない。彼の方法は常に比較による。この事はとりわけ彼の過程モデルに当てはまる。彼はそれを一九八六年に再度要約して概略を述べている（一九八六年）。それは大抵の支配的な「進化論の」モデルよりも具体的で遥かに人の心を動かす。とりわけそれには、しばしば専ら専門化への興味から発展した、「アカデミックな専門」という厳しい境界づけへの傾向がない。彼のむしろ反専門家的、専門統合的、普遍的姿勢はより包括的な学問的総合に到達するためのあらゆる試みの前提である。この点でエリアスは後に「フランクフルト学派」と呼ばれた思想家グループの人々の研究方法に近い。しかし彼は「モデルのモデル」、科学一般の多次元モデルという全く特定の関連概念で自分の姿勢を基礎づけている（一九八三年）。そのような構想は、分析的科学論が支配的な時代には、例えばどこにその射程、意味及び精確さがあるのか（グーズブローム　一九七九年）、といった多くの疑問にさらされている。様々の時代を包括し、様々の文化を比較しながら、それにも拘らず決して思弁的でないこのやり方の有効範囲は明らかである。世界中の各国語への翻訳が増えているという事はその研究方法に対する他の人々の関心を示すひとつの指針である。この研究の他の学問分野への意義はこの研究の「受容と批評」によっておのずと充分に測られる。しかし、「正確さ」とい

う言葉によって理解されるのは、支配的な哲学的科学論に照らせば形式論理的規則の遵守並びに厳密な概念的定義づけである。そして忘れてはならないのだが、勿論これに対立しているのが、制御された自分達の概念性を得ようと殆ど努力する事のない圧倒的多数の歴史研究家達である。どの「歴史心理学」も個々の学問状況のもつこのジレンマと実際に取り組まなければならない。エリアスは彼が選んだ道を厳密に名付けて（一九八四年、一七四頁）、「哲学的絶対主義からも歴史的相対主義からも等しく遠い距離をおいた」観察方法と呼んでいる。より大きな「より精確な」対象妥当性を、従って彼は、とりわけ他の人々からしばしば全くなおざりにされたモデル理論的傾向にも関係づけている。彼は多視点による概念形成に注意を払う。彼は「社会学者の現在への退却」を批判する。「現在」は同様に実際すでに大抵の心理学者の唯一の研究分野である。歴史家達も又しばしば同じように「過去」へすっかり引きこもってしまった。そして彼は専ら共時論的な事件経過を研究しているあの学者達の通時論的見方のために、同等の妥当性を、しかもより高い抱負を持った過程モデルという形で調達しようとする。

徐々にではあるが学問研究の実践の上でも幾つかの成果が現れてきて、エリアスの仕事から出発した心理学者、歴史研究家、社会学者の間のより集中的な対話への機運が高まっている。これらの学科間の相互関係に対して彼は繰り返し発言している。著作全体に分散した形であれ、心理学に対しては規則的に、「社会学と精神医学」（一九七二年）の関係に対してはより体系的に、そして「社会学と歴史学」（一九六九年）に対してはより批判的に。この批判は今日尚有効である。エリアスは彼の著作を以って、そのような専門的諸観点を統合する全体モデルを提供するものと自負してはいない。「社会科学の中心理論への一寄与」をする事を彼は願っている。それに加えて彼は、学問「外」あるいは「前」の、そして勿論学問の総合形成のモデルを構想している。それは、歴史心理学（職業的伝記の個人的偶然性を含めて）へ向かうこういった各専門の観点を彼なりに総合する独自の形態というよりも、むしろ例えば、彼の総合形成、概念形成の技術あるいは概念回避技術といった彼の独特の研究方法であり、後の歴史心理学が拠り所とする事が出来るものである。別の言い方をすれば、理論知を一歩一歩積み重ねて行く過程には、事実知の統合の同様の経過が対応しなければならない。この事は専ら分析的科学論が支配的な時代には、多くの社会学者によって忘れられている。それは例えば彼等が、K・マルクスあるいはM・ヴェーバーのような以前の研究者達のその時々に到達された総合水準を更に展開しようとしながら、彼等のカテゴリーを、その間にまた生まれた経験的な事実知を同時に顧慮する事なく、ある程度歴史とは切り離して引き継ぐ場合などに見られる。そういう形で数多くの理念的なモデルは作られて行くが、それらをもっては個々の事実についての増大する知識はもはや全く統合され得ない。その上個々の学問の知識増大のテンポは、程度は様々であれ、加速される。未来の学者世代はそれ故学問的知識の流れ全体からまた新たな独自の総合を新しく作り出して行くだろう。個々人や集団の総合能力は従ってまたモ

デル理論的知識統合を測る尺度になるだろう。今新しい総合水準を獲得しようとする者は、ある特定のモデル、一つの理念的理論的モデルに従うよりも、むしろ「状況の論理学」から、そしてモデルに到達し得るあらゆる知識から新しい総合の歩みを試みるだろう。エリアスはそのための独自の道を指し示している。

三

エリアスの貢献を「歴史心理学」の他の試みと比較するとなれば、まず以って彼の「心理学」の出所を尋ねなければならない。それについてエリアスは『文明化の過程について』の中で記している（一九三九年と一九七六年、第一巻、三二四頁）。「この研究がどれほどフロイトと精神分析学派の先行する研究のお蔭を被っているかは、この場合殆ど言うまでもない事だが、しかしここで一度明確に強調しておくのがいいかも知れない。精神分析の文献に精通している人になら誰にでもその関係は明らかであり、個々の点に亙ってそれを指摘する必要はないように思われる。特にそれは詳細な対照抜きにはなされないだろうから。同様にフロイトの基礎にある大前提とこの研究のそれの間の少なからぬ相違についてもここではとりたてて強調されない。特に恐らくこの点については幾つかの議論の後にそれほど大きな困難なしに了解に達する事が出来るだろうから。もっと重要だと思われるのは、この箇所、あの箇所と比べ合わせるよりは、思想の骨組を出来るだけ明白に具体的に組み立てる事である。」――「少なからぬ相違」の方は確かに後に批評家達によって指摘されたが、彼が受けた他の影響についてはそれほど注意されなかった。哲学研究の前に数年間医学を勉強したエリアスは、生理学的動物行動学の中心的洞察と構想を受容している。例えば行動の「刻印づけ（インプリンティング）の場」としての宮廷、あるいは「言語の流れの刻印づけ機関」としての大学というふうな語り方がなされる。「人間の行動の独特な変化」としての文明という見方も、選ばれた実例そのものも、またとりわけ行動の概念も、総体的な身体表現と活動に関連づけられている。「全体的な」（ganzheitlich）把握に関してエリアスは少なくとも二つのルートを通じて知られるようになった。一つは同じ頃フランクフルトで教えていたマックス・ヴェルトハイマーを巡るサークルを通じて、そして次には精神分析家で友人のS・H・フックス、本名 Foulkes を通じてである。S・H・フックスは、第一次世界大戦の脳損傷者に関する有名な研究で知られた神経科医クルト・ゴールドシュタインの直弟子であった。結局彼は、あちこちで述べているように、ヴィルヘルム・ライヒの初期の著作を評価した。その事を「心の鎧」とか「情緒家政のモデル化」といった表現が証言しているかも知れない。精神発生とか社会発生という表現はエリアス以前にも度々使われた。非常に集中的に使ったのが、例えばエリアスが二〇年代の終わりに師事したアルフレート・ヴェーバーであり、また恐らくヴィルヘルム・ヴントである。しかし誰もそれ以前にそれについてそれほど広範な、細分化され歴史的実例によって証明された多次元モデルを構想した人はいなかっ

た。

他の学派と比較して目につくのはヨハン・ホイジンガの『中世の秋』（ドイツ語第一版、一九二四年）についてのエリアスの際立って高い評価である。幾つかの点でフランスの「メンタリティーの歴史」との類似点も認められる。しばしばエリアスは批判的にL・レヴィ＝ブリュールと対決している。しかしフランスの「心性史家達」は、新旧を問わず、彼等の時代の心理学的学派に対してかなりの社会的距離を取り、認知的な変化と情緒的な（感情的な）変化の同時並存を充分には区別していない。彼等はむしろこの点でマルクスの下部＝上部構造＝概念に近い。エリアスはこういう観点に立って、カール・マンハイムとの長い関係から出発して、知識社会学をその生涯に亙って更に発展させた。彼の仕事の全てはそれによって貫かれている。メンタリティー研究者が「全体史」の方へ向かって動くところでは、エリアスの「多次元」構想との類似が成り立つ。しかしエリアスの社会過程モデルは「長期持続」という概念に理論的にも実践的にも勝っている（ヨッケル、一九八四年　参照のこと）。

後にとりわけアメリカ合衆国で成立する「心理史」と比較してたちどころに明らかになるのは、精神分析的理論枠を受け入れるに当って、正統信仰をめぐる努力を断念する事が、どれほど事態に即したモデルへの道を開く事が出来るかという事である。そのモデルは、その上必要とあれば他の心理学派の諸成果とも、遥かに現実に適合するように統合され得るであろう。社会を長期的展望の下へ置こうという傾向は心理史家の場合にはそれほど発達していない。他の研究レベル、特に全体社会の発展ないし「人間＝自然」関係との、モデル理論的統合は不明確なままであり、権力理論も欠けている。

「批判的心理学」との類似性も様々な点に見られる。例えば、個人の発達の長期的条件あるいはその条件の全体社会的枠に対する思想的な顧慮の中に。また例えば支配的な「変化する心理学的行動の構造的な党派性」（ホルツカムプ、一九八五年）、ないし観察者の立場は、常に実験的な人間の状況「外」にあれ、というその言外の普遍的な要求から距離を置くという傾向の中に。更にまたエリアスは例えば、すでに「カテゴリー分析的規定」ないし、概念的区別の中に、心理学内の「真の現実性を帯びた」認識価値が含まれている、という見解にも完全に同意するかも知れない。ここで彼は方向づけの知識としての理論の機能について語っていると言えようか。ただし見解の相違も多々ある。そこで本来の歴史的知識が殆ど処理されないとすれば、どのようにして「歴史的アプローチ」である事を明白に要求しつつ、同時に印象深い思想体系を築く事が出来るのか？　そしてどのようにして相も変わらず専ら「分析」と「行動」に向けられた思考、全体の中のごく小さな部分の探索に向けられたやり方が、全体社会の概観を求めるマルクスの要求と結び付けられるのか？それは統合なき分析に終りはしないか？

四

エリアスの歴史社会学的心理学への入門のためには、彼の本来の

処女作である『宮廷社会』（一九六九年）が有益である。それは又彼の包括的な権力理論を初めて理解するのにも適している。彼が好んで用いた、あるいは彼が作り出した諸概念、ないし彼の概念形成と概念回避のテクニックについての概観は、彼の手によるこの本のインデックスが提供してくれる。この本のオランダ語版のJ・グーズブロームの『エリアス、社会学とは何か?』（一九七一年）にも追加された信頼出来る概念インデックスがついている。『過程書』の末尾の「文明理論の構想」に含まれる幾つかの章（一九三九年と一九七六年、第二巻、三一二頁以下）は歴史心理学への彼独自の貢献を集約した形で具現している。

歴史心理学的研究方法をはっきりさせるのには、『文明化の過程について』（一九三九年と一九七六年）の第一巻を読むのが一番いい。概念展開の科学社会学的、知識社会学的分析を背景にして、様々の源泉から例えば「態度の変化」といった長い時系列が形成される。第二巻では他の「人間によって形成された社会的図柄あるいは二つの反対方向の内の一方に於けるその局面の長期に亙る変化」とその時系列との結び付きが研究される。ここでは例えば行動の「コントラストの縮小や変種の拡大」の過程が暴力や税の独占、つまり「国家」、の成立と関連づけられる。

研究方式のコメントとしては、次のものを読めばいい。モデル理論に関連した疑問に対しては『社会学とは何か?』（一九七〇年）。総合形成の理解と方法論のためには『時間について』（一九八四年）。「人間諸科学」に於ける研究者の問題に対しては、つまり自分の研究対象である他の人間に対する自分自身の関係をもっと自己規制してコントロールする事を学ぶためには、『参加と距離化』など。これらのうちに、心理学者達は——間接的にではあるが——どうしたらもっと強く「変動する心理学」から距離をおく事が出来るか、歴史家達はどうしたらもっとはっきりと特別な「出来事の一回性」への信仰から距離をおく事が出来るか、を発見するだろう。そしてこの事はとりも直さず、心理学者であれ歴史家であれ、いかにして彼等が、集団の信仰としてこの種の職業理想にしがみついている学者集団からもっと自覚的な感情的距離化に到達出来るか、そして同時に、それにも拘らず、いかにして研究対象になっている人間の行為に、遥かな昔に生きていようと今現在生きていようと、感情移入しながら、深く関り、参加出来るか、という事を意味するだろう。

注

（1）エリアスの業績の完全な文献目録は „Materialienbänden“ (Suhrkamp の Materialien zu „Über den Prozeß der Zivilisation“) に含まれている。そこには又各国に於ける「受容と批評」に関する最初の文献もある。一九八三年—一九八六年の間の分については（TCS、五四一頁以下）。

伝記について。N・エリアスは一八九七年ブレスラウに生まれる。そこで医学の勉強を始める。一九二四年哲学の博士号取得。ハイデルベルクで社会学の勉強をし、フランクフルトで研究助手となる。一九三三年亡命。最後はイギリスのレスターで教えた。年金退職後一九六二年からガーナ、アメリカ合衆国並びに多数のヨーロッパ諸国に居を構え、一九八七年アムステルダムに移り住む。更に詳しい指摘並びに

自伝的情報はグライヒマン（一九八七年）、コルテ（一九八八年）に見られる。エリアスについての外国語の研究文献はグーズブロームによる „Festschrift“（一九八七年）やイギリスの雑誌（TCS）に見られる。

（2）エリアスの心理学的見解に関しては：R. Blomert: „Untersuchungen zur Entstehung der Zivilisationstheorie von N.E.“ ベルリン自由大学学位論文 一九八七年。エリアスの影響を受けた心理学的業績に数えられるもの：M. Schröter（一九八五年）: „Wo zwei zusammenkommen in rechter Ehe...“。T. Kleinspehn（一九八七年）: „Warum sind wir so unersättlich?“。C. Wouters & B. van Stolk（一九八七年）: „Frauen im Zwiespalt“。とりわけオランダでは：A. de Swaan（一九七七年）: „Psychoanalytische Aufsätze“ ドイツ語その他、雑誌 Psyche 所収。更にとりわけオランダ語で書かれた、福祉国家の政治社会学並びに医療社会学のための彼の業績：A. de Swaan（一九八一年）: „De mens is de mens een zorg“ アムステルダム Meulenhoff。A. de Swaan（一九八三年）: „Halverwege de heilstaat“ アムステルダム Meulenhoff。更に J. M. W. van Ussel（一九七〇年）の性科学の業績（一九七〇年）（ドイツ語：„Sexualunterdrückung“）や B. van Stolk の性科学の業績。更に Ch. Brinkgreve（一九八七年）。オランダの精神分析 een vestigingsstrijd.

（3）文献リストには使用された文献だけを取り上げてある。上述の著作はもっと詳しい情報を得るのに役立つだろう。

文献

Elias, N. (1939). Über den Prozeß der Zivilisation, 2 Bde. Frankfurt/M.: Suhrkamp.

Elias, N. (1969). Die höfische Gesellschaft. Frankfurt/M.: Suhrkamp 1983.

Elias, N. (1970). Was ist Soziologie? München: Juventa.

Elias, N. (1972). Soziologie und Psychiatrie. In Soziologie und Psychoanalyse (S. 11-41). Hg. v. H.-U. Wehler. Stuttgart: Kohlhammer.

Elias, N. (1976). Een theoretisch essay over gevestigden en buitenstaanders. In ders. & J. L. Scotson, De gevestigden en de buitenstaanders (aus dem Engl.) (S. 7-46). Utrecht, Antwerpen: Spectrum.

Elias, N. (1982). Scientific establishments. in Sociology of the Sciences Yearbook 1982 (S. 3-69). Hg. v. N. Elias, H. Martins & R. Whitley. Dordrecht.

Elias, N. (1983). Engagement und Distanzierung. Frankfurt/M.: Suhrkamp.

Elias, N. (1984). Über die Zeit. Frankfurt/M.: Suhrkamp.

Elias, N. (1985). Humana conditio. Frankfurt/M.: Suhrkamp.

Elias, N. (1986). Figuration; Soziale Prozesse; Zivilisation. in B. Schäfers (Hg.), Grundbegriffe der Soziologie. Opladen: Leske & Buderich.

Elias, N. (1987). Die Gesellschaft der Individuen. Frankfurt/M.: Suhrkamp.

Elias, N. & Scotson, J. L. (1965). The established and the outsiders. London: F. Cass.

Gleichmann, P. R., Goudsblom, J. & Korte, H. (Hg.) (1977). Human figurations: essays for/Aufsätze für N. Elias. Amsterdams Sociologisch Tijdschrift.

Gleichmann, P. R., Goudsblom, J. & Korte, H. (Hg.) (1979). Materialien zu Norbert Elias' Zivilisationstheorie. Frankfurt/M.: Suhrkamp.

Gleichmann, P. R., Goudsblom, J. & Korte, H. (Hg.) (1984). Macht und Zivilisation. Frankfurt/M.: Suhrkamp.

Gleichman, P. R. (1987). Norbert Elias — aus Anlaß seines 90. Geburtstages. Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie, 2, 406-417.

Goudsblom, J. (1979). Soziologie auf der Waagschale. Frankfurt/M.: Suhrkamp, (2. ndl. Aufl. 1983).

Goudsblom, J. (1987). De sociologie van Norbert Elias. Amsterdam: Meulenhoff.

Holzkamp, K. (1985). Grundlegung der Psychologie. Frankfurt/M.: Campus.

Jöckel, S. (1984). „Nouvelle histoire" und Literaturwissenschaft, 2 Bde. Rheinfelden: Schäuble.

Korte, H. (1988). Norbert Elias. Vom Werden eines Menschenwissenschaftlers. Frankfurt/M.: Suhrkamp.

Theory Culture & Society, Explorations in Critical Science, vol. 4, no. 2-3, June 1987; London: SAGE; special issue: Norbert Elias and Figurational Sociology.

あとがき

本稿は Peter Reinhart Gleichmann の Zur Historisch-Soziologischen Psychologie von Norbert Elias (Beltz-Psychologie Verlags Union 出版の Gerd Jüttemann 編 „Wegbereiter der Historischen Psychologie" (1988) 所収) の翻訳である。グライヒマン氏はハノーバー大学社会学教授。本来歴史家であるが、エリアスの弟子であり遺稿の編者として知られている。本稿は人間科学の学際的研究の方法的基礎に関する多くの示唆を含んでいると思い、特に原著者の了解を得て翻訳したものである。尚、同じ著者によるエリアスの思想と人間についての興味深い総合的考察として、エリアスの生誕九〇年に捧げられた「ノルベルト・エリアス――九〇才の誕生日に寄せて」(宮田敦子訳「みすず」一九九一年一一月号) を参照して頂きたい。(徳永記)